7　近藤家文書について

――大森寿庵と越後の眼科医近藤文泰

広瀬　秀

新潟県豊栄市に在住する近藤家は、口伝、過去帳によれば江戸時代から大正にかけて、代々医家であった。このたび、演者は近藤家に伝わる江戸中期から明治初期にかけての文書類中、二十二点の医学関係文書を発見したので逐次報告したい。

近藤家は北蒲原郡内嶋見村（現豊栄市内嶋見）に存在し、明治天皇行幸時には御休所となり、また、岩倉具視侯越後巡幸にも宿所を提供したこの地域の名家である。近藤家の来歴は新発田市史、豊栄市史いずれにも記されておらず、その出自は不明な点が多い。また、近藤家文書の存在も知られていないようである。

近藤家第十一代近藤文泰（三代文泰通称寿白）、第十二代近藤文泰（四代文泰通称寿次）、第十三代近藤文龍は、いずれも眼科医で、そのうち三代文泰寿白は新発田藩医であったとの口伝がある。しかし、溝口藩世臣譜には記載がなく、今回調査した文書により、内嶋見村に眼科開業の傍ら新発田藩に安政三年十二月から明治四年十二月まで士族二人扶持で仕えていたことが判明した。また、安政年間に流布されたと思われる「芝田医者鑑」には、長谷川杏庵、山内甫忠など新発田近在の有名な医家と共に近藤文泰の名を認めることができる。

一方、大森寿庵は仙台伊達藩の藩医として大家を成し、眼科史においてはプレンキの眼科書を宇田川玄真に翻訳させるのに一役かったことでは有名である。

大森寿庵も寿庵右武、寿庵右直、寿庵右長と三代続いた眼科医で、その子孫も医学関係に進んだ人が多い。寿庵三代は江戸詰医師として重用され、特に二代目寿庵右直は堀田摂津守、松代周防守などの幕府諸侯の眼病治療で名声を馳せた。

大森寿庵については、昭和十六年の長谷部言人博士の研究があり、多数の門下生があったとされているが、現在では四名の門下生が知られているのみである。

今回調査した文書では、近藤文泰（三代）が文政七年十月に江戸で大森寿庵右直に学び、足掛け七年の勉学ののちに郷里内嶋見村へ帰郷して、天保二年から眼科を開業しているのがわかった。一般眼疾の他に義眼も調製していたという記述もあり、その製作法を記す文書が眼病治療薬処方と共に存在している。

長谷部博士は昭和十六年の大森寿庵研究に際して、仙台市郊外に在住する大森家の現地調査を行なったが、初代寿庵右武が残した「眼科秘伝書」を調査することができなかった旨、論文に記している。これと同一の秘伝書か今後の調査が必要であるが、近藤家文書には桐箱に収められ、装飾布で表装された「大森流秘伝眼科巻」と名付けられた巻物一巻も残されている。

さらに近藤家文書には、近藤文泰以前の近藤家当主に関連すると思われる江戸中期の貞享年間から宝暦年間までの古文書五点が含まれており、いくつかの文書に「検校」「学問所」の文字が散見される。このことから、この文書群は当道の告文状（座頭などの免許状）と思われる。ちなみに近藤家第八代当主（享保十七年生）は視覚障害者だったので、息子の初代文泰が眼科医を志したとの伝承がある。

江戸時代における新潟の眼科医で、従来成書や文献で知られることのなかった近藤文泰の存在が判明したので、その師である大森寿庵との関連を今後、近藤家文書により調査してみたい。

（広瀬歯科医院）